2018年度 ロザリー・レナード・ミッチェル 記念奨学金募集案内

立教大学ジェンダーフォーラムは、本学女子学生寮であったミッチェル館の理念を引き継ぎ、ジェンダーについての教育・研究活動の拠点として 1998年４月に誕生しました。本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者（団体）、あるいは活動・研究を計画している者（団体）を幅広く対象とします。

書類提出期間 ： 2018年 4月２日（月）～ 2018年 4月 27日（金） 17：00まで

書 類 提 出 先 ： 学生部学生厚生課奨学金係・新座キャンパス事務部学生課・独立研究科事務室

採 用 発 表 ： 5月 21日（月） 学生部学生厚生課奨学金掲示板、新座キャンパス奨学金掲示板、ジェンダーフォーラム掲示板（10号館通路）に掲示予定

授　与　式 ： 5月下旬（予定）

（B）活動・研究助成金

対　　象 ： 学部学生・大学院生（個人・団体）

支 給 額 ： 総額２０万円

採用件数 ： １～２件

選考方法 ： 書類審査・面接

提出書類 ： ①活動・研究助成金願書＊
②奨学金使途を含む活動・研究計画書
（A4用紙 3枚程度 書式自由）

面接日時 ： 2018年 5月 14 日（月）18:30～を予定。
個々の面接時間はあらためて連絡する。

面接会場 ： 立教大学池袋キャンパス、16号館第２会議室

備　　考 ： 採用者（団体）は活動・研究の中間報告を 10月末に提出の上、最終的な報告書または論文を翌年1月中旬に提出すること。提出の活動報告書または論文は、ジェンダーフォーラム『年報』に掲載する。

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金（A）・（B）の申込書（願書）の利用目的】

標記の申込書（願書）で取得した個人情報は、奨学金採用者（団体）の選考および発表のために利用する。採用者（団体）の論文・報告書等は「年報」に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、ＷＥＢ等に採用者名を記載することがある。

以上に同意した上で、申込書（願書）を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、「プライバシーポリシー：立教大学における個人情報の取扱について」（http://www.rikkyo.ac.jp/privacypolicy/privacypolicy.html）に準じる。

※（A）ジェンダーフォーラム論文賞の募集は 10月に行います。詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。
ジェンダーフォーラム事務局（池袋キャンパス６号館１階）　Tel：03－3985－2307　E-mail：gender@rikkyo.ac.jp

＊申込書、願書はジェンダーフォーラム事務局、学生部学生厚生課窓口、新座キャンパス事務部学生課、独立研究科事務室窓口にあります。
ホームページ上からもダウンロードできます。（http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/）

2017年度ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金 A 授与者決定!

2017年度後期に行われた（A）論文賞には２件の応募があり、2017年 11月 24日に開催された選考委員会において、１件に助成金を授与することを決定いたしました。また、授与者には、12月 14日に開催された授与式にて、和田悠所長より奨学金が授与されました。選考結果は下記のとおりです。

ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金（A）活動・研究助成金選考結果

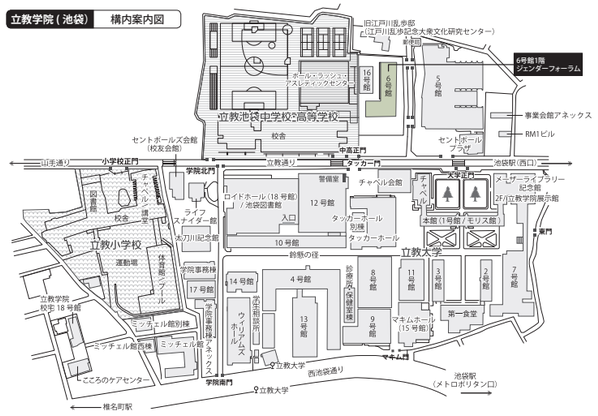
奨学生氏名（所属）	タイトル	支給額
藤原　真以子（文学研究科日本文学専攻博士課程前期課程２年）	「田村俊子『生血』における自己同一性の表象」	５万円

立教ジェンダーフォーラムのご案内

「常識」にとらわれず、性差やセクシュアリティ（性自認・性的指向など）についての問題を本音で語り合い、考える場、それがジェンダーフォーラムです。ジェンダー（gender）とは、社会や文化の「常識」にしたがってつくられた性差のこと。「女／男らしさ」「女／男役割」や異性愛を「あたりまえ」とする考え方もそのひとつです。「常識」「あたりまえ」とみなされている性をめぐる社会通念・制度・規範には、一人ひとりの個性的なあり方を抑圧するものが少なくありません。ジェンダーフォーラムは、女子学生寮ミッチェル館（1998年閉館）の精神を受け継ぎ、ジェンダーについての教育・研究拠点として 1998年に誕生しました。ジェンダーに関する身近な違和感をもっている方から学識を深めたい方まで、様々な人に広く開かれています。より多くの人々が、自分自身の問題として社会生活における「ジェンダー」に気づき、理解し、考える契機となるよう、公開講演会やジェンダーセッション、コーヒーアワーなどを開催しています。

開　室　日：毎週月曜日～金曜日
開 室 時 間：10：00～16：00
場　　所：立教大学池袋キャンパス６号館１階
TEL＆FAX：03－3985－2307
E-mail：gender@rikkyo.ac.jp
URL：http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/

ジェンダーフォーラムは 2013年３月に、ミッチェル館から６号館へ事務室を移転しました。



詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板または HP でご覧ください。

Rikkyo Gender Forum
News Letter
Gem

Vol·38
2018.3.31
立教大学ジェンダーフォーラム

Ｇｅｍとは…光輝く宝石。
ジェンダーフォーラムの前身である女子学生寮「ミッチェル館」にちなみ、Gender Encountering at Mitchell（ミッチェル館でのジェンダーの出会い）を意味します。

映画上映会（2017年 10月６日（金））

記録映画『まなぶ 通信制中学 60年の空白を越えて』上映会＆監督講演会

登壇者：太田直子氏（『まなぶ』監督、フリー映像ディレクター）

『まなぶ―通信制中学 60年の空白を越えて』（太田直子監督）は 2009年から 2014年までの５年間、東京都千代田区神田一橋中学校の通信教育課程（通信制中学）における学びの実態を撮影した記録映画である（2014年に NHK 教育テレビの「ETV 特集」で一部放映。2017年３月に劇場公開）。

「通信制中学」は戦後の教育改革で誕生した。戦後、複線型から単線型に教育制度が改められ、義務教育は中学校までの9年間となる。それにともない中学校３年間の「義務教育」に欠ける人たちが出てくる。その人たちを対象に「通信教育」によって中学校の教育課程を修了できるようにしたのが「通信制中学」であり、全日制の中学校ないし高校に併設された。当初は全国に 80校ほどあったが、現存しているのは２校（もう１校は大阪市立天王寺中学校）で、全課程を履修でき卒業証書を手にできるのは本映画の舞台の神田一橋中学校だけである。

「義務教育」を保障する教育という点で「夜間中学」（中学校夜間学級）に似ているが、「夜間中学」が全日制であるのに対して、「通信制中学」は単位制である。自宅での学習が基本で、月に２度の休日に設定されているスクーリングに学生たちは通い、試験を受けて単位を取得していく。現在の学生はいずれも戦後の混乱や貧困のなかで中学校に通うことができなかった人たちで、70歳を超えている。

墨田区立文花中学校夜間学級を取材した記録映画『こんばんは』（森康行監督、2003年公開）はよく知られている。失われた学び舎での青春を取り戻すべく、人生の終盤にさしかかった人たちが識字を求めて学び続ける学校での学びの様子を中心に描かれた作品である。それに対して『まなぶ』はスクーリングの授業場面に加えて、６人の生徒一人ひとりの個人的な背景に踏み込み、いま、なぜ神田一橋中学校で学んでいるのか、その動機や意味を映像によって明らかにしていく。カメラは家族や夫婦の人間関係にも向けられる。教室の場に限らずに、学習者としての主体のありようを全体として捉えようとする。さらに、学校の休み時間や登下校前後の学校外での生徒たちの「つきあい」世界に着目し、繊細な言葉と感情のやりとりを描き出す。このあたりに本作品の特徴がある。

映画に登場する生徒のなかで強い印象を与えるのは宮城正吉さんである。宮城さんは中学校を卒業していないため履歴書を必要とする仕事を避け、飯場を渡り歩くような不安定な就労生活を強いられた。縁あって年上の女性と結婚することになるが、結婚生活では妻に対して暴力を繰り返していた。

その宮城さんは通信制中学に通うなかで初めて自己が満たされていく。学歴社会のなかで抱えた劣等感を飼いならし自信をつけるとともに、自らの境遇を運命として呪うのではなく、客観化できるようになっていく。それは、男性性の問い直しの契機を含む「自暴自棄」だった自らの過去との和解のプロセスであり、そのために「まなぶ」ことが不可欠だった。

太田直子監督は学習権を保障することなく国民を置き去りにする国家の暴力と DV の暴力との二つの暴力を重層的にとらえ、人間であることを取り戻す行為としての「学び」の意味や切実さをこの作品で視聴者に問いかけた。この点で『まなぶ』は教育映画というカテゴリーに収まることのない、「非暴力」と「人権」の思想に根ざした女性監督による「フェミニズム映画」ということができる。ジェンダーフォーラムとして上映会を開催した所以である。

身近なことだけに学校や教育に関心のある人たちは多い。これから各地域や各種ジェンダー機関で自主的な上映会が開かれることを期待したい。

オフィシャルサイト　http://www.film-manabu.com/

和田 悠（ジェンダーフォーラム所長、文学部教育学科准教授）

第 72 回ジェンダーセッション（2017 年 11 月 13 日（月））

「著者と語り合う！『文科省／高校「妊活」教材の嘘』を読む」

登壇者：西山千恵子氏（青山学院大学・慶應義塾大学ほか非常勤講師）
柘植あづみ氏（明治学院大学社会学部教授）

今回のジェンダーセッションでは『文科省 / 高校「妊活」教材の嘘』(2017 年論創社) の執筆者である柘植あづみ氏と西山千恵子氏から直に高校保健の副教材における問題点についてお話を伺った。

柘植氏と西山氏は将来幅広い世界で活躍することを志す女子高校生とその学校の保健の先生に扮し、保健の授業で配布された副教材から女性にもたらされる印象について寸劇を交えて説明された。曰く、妊娠、出産などの女性のライフコースに対する画一的な価値観が反映されたグラフや文章構成、イラストなどが高校保健の副教材には溢れているのだという。さらに言えば副教材の中で用いられるグラフなどの中にはデータの改竄と言わざるを得ない程の恣意的な編集やタイトルのつけ方がなされているものもあり、正確性からはかけ離れた内容も多く掲載されているという。例えば「女性の妊娠のしやすさの年齢による変化」というタイトルのグラフは性交頻度や男性の年齢などの様々な要因が作用する妊娠という現象を女性の年齢という要因だけで一つのグラフにまとめるのは無理がある。また、このグラフは出典先からの孫引きとなっており、原典のデータとは大きくかけ離れている。他にもこのような言葉のマジック、あるいはグラフのマジックというような内容が掲載されていたこと、そして柘植氏らが文科省に抗議した結果一定の改善が見られたこと、しかし未だに正確さに欠ける内容やジェンダー的に問題の残る記述が掲載されていることなどが紹介された。

そもそも私はあまりジェンダー問題について強い問題意識を持っていたというわけではなく、ほんの少しの関心や先輩からの勧めなどのいくつかの偶然の重なりで本セッションに参加したに過ぎない。高校で妊活ということが取り上げられていることに対しても衝撃を覚えたほどだ。さらにその副教材に「嘘がある」とはどういうことなのかということに興味を持った。教科書の内容は国の都合が反映されやすいということは既に学んでいた（今回の副教材も文科省の著作であることから教科書以上にそうした性質を持つことは間違いない）。その上で、生徒児童の考えるための材料の一つとして教科書を用いるという考え方も学んでいた。しかしその考えはあくまで教科書に掲載されている資料などが正確であるという前提に立っている。本セッションで副教材の中のグラフの恣意性の説明を受け、その前提は崩れてしまった。

説明を聞いているあいだ、私はそんなはずはないという苛立ちや戸惑い、本当にそうなのかという疑いを感じていた。それと同時に、そんなことを感じている自分の存在にから、教師や教科書の言うことを疑わずにいれば評価が得られる学校という社会の中で 12 年かけて形成されていった権威主義的価値観が未だ根深く自分の中に残っていること、そしてその根深さから、教育とその内容が社会に与える影響の重大さを再認識させられた。この権威主義が根深くはびこっている間はジェンダー問題についての根本的な解決を見るのは不可能なのではないだろうか。

将来教育に携わる仕事を志す者として、まず権威主義的価値観から脱却し、教育に関して批判的な視点を持ち、主権者を育てるために努力する必要性をこのセッションに参加して私は感じた。

佐藤正紀（本学文学部教育学科 2 年）

第 73 回ジェンダーセッション（2017 年 12 月 11 日（月））

「性風俗で働く人々と " 女性自立支援”」

登壇者：要友紀子氏（SWASH 代表）

ジェンダーフォーラムの主催で行われた第７３回ジェンダーセッションは、要友紀子（かなめゆきこ）さん（SWASH[Sex Worker and Sexual Health] 代表）の講演。偶然キャンパス内の立て看板で知り、スケジュールを変更して参加した。

実は私の授業（キリスト教学講義３５、３６）でもジェンダーや性倫理を扱っており、その中でセックスワーカーについてみんなで考えるコマをも設けている。「ふしだらだから良くない」というのは蔑みでしかない。しかし「自分を大切にしていない」という意見はよく出てくる。それではその判断は正しいのだろうか、と。

私自身、長い間性産業を「悪」だと考えていた時代がある。お金で性を買うのは暴力でしかないと思っていた。けれど、様々な出会いや経験を通して、自分の中に刷り込まれていた価値観が崩されていった。女性差別は許してはならない。しかし性産業＝女性差別というわけではない。人間の体や尊厳をお金で売買してはならない。しかし性産業が体や尊厳を売買しているとは言い切れないし、逆に性産業以外でも尊厳が売り買いされている現場はいくらでもある。にも関わらず、性産業だけがやり玉に挙げられるのは何故？そんな疑問を絶えず抱きながら、要さんの話にヒントを得たくて参加した。

一言では報告や感想を述べるのは難しい。それでもたくさんの言葉が印象に残ったので一部紹介したい。「お客さんに主導権を握られないためにセックスワークソーシャルワークやエージェンシーとなる」「合法化と非犯罪化の違い（ニュージーランドなどは非犯罪化）」「結婚した人がみんな男社会に組み込まれた人だとは言い切れないのと同じように、個々の選択の多様性は似ている」「民間支援団体と風俗店スカウトマンの対立図式が最近よく言われるが、どちらもごはんと寝床（とお金）が得られる。むしろ保護と安全を与えようとする支援者にすがることが自分の判断と言えるのか考えたい」「人生のコントロール感を得ている風俗」「粘膜接触は怖いよ、危険だよと言ってやめさせようとすると、もう相談には来なくなる」etc.

自分の居場所が欲しくて、自分を必要としてくれる人が欲しくて性産業に入る人がいる。それに対し、「正しい居場所を用意してあげれば、性産業などに従事しないで済む」と言って居場所づくりの活動をする人たちがいる。それ自体はとても大切なことであろう。けれど、「セックスワーカーとしての居場所は間違っている」という決めつけが、やはり自分たちの中にあるのではないか、そういった問いかけを要さんから受けたように思う。

以前ある場所で「売春肯定論」という言葉を使った際、「否定とか肯定とかではなく、そこに身を置いている人、そこで生きている人にもっと目を向けないといけない」とある人に指摘されたことがある。とても大切な指摘だったと思う。「いいか悪いか」という議論を当事者不在で行うのではなく、また安易にジャッジするのでもなく、実際に現場の声を聴いていきたいと思った。

平良愛香（日本キリスト教団牧師）

2017 年度立教ゼミナール報告＆ 2018 年度全カリ紹介

2017 年度は「いのちと暮らしのジェンダー論」と銘打った「全カリ」のコラボレーション科目を提案部局となり開講しました。私と一緒に授業のコーディネートを務めてくださったのは新進気鋭の社会学者の清原悠さん。論理や概念を重視し、ジェンダーをめぐる諸問題について冷静に考察を加える知性に魅了された学生は少なくなかったと思います。

コラボレーション科目は「多彩な学び」にふさわしく、ゲストスピーカーを自由に招へいすることができます。本科目では、翻訳家で科学技術論に強い高橋さきのさんには理系的なセンスを活かしたジェンダー論の入門を、アジア女性資料センターの濱田すみれさんには憲法 24 条をめぐる改憲論議や「慰安婦」問題を軸にした性暴力の話を、『からゆきさん：海外〈出稼ぎ〉女性の近代』の著者である嶽本新奈さんには近代日本の性規範をめぐる諸問題を、SWASH 代表の要友紀子さんには当事者視点から「セックスワーク」についての現状や課題を、石牟礼道子研究でも知られる研究者の間庭大祐さんには水俣病における複合差別を、育児問題ジャーナリストの猪熊弘子さんには待機児童問題に代表される保育問題を、それぞれお話いただきました。

全体を通じてセクシュアリティに関する議論に比重が置かれたのが特徴で、そのなかでも要さんの話は内なる「セックスワーカー」への偏見や差別をあぶりだす具体的なもので、常識が覆る強いインパクトを履修者にあたえました。

2018 年度は「立教ゼミナール発展編」を開講します。少人数のゼミ形式の授業です。2016 年度と同様に保育や子育てをテーマにしますが、今回は 1970 年代から 80 年代にかけて千葉県松戸市で活動していた子育てサークル「てくてく勉強会」で回覧・交換されていたノート『てくてくノート』を輪読します。『てくてくノート』には当時の女性たちの子育ての悩み、夫婦関係にある葛藤や対立、職場での困難などが書きこまれており、ポスト高度成長期に展開し女性たちのネットワーキングをジェンダー規範とのかかわりで考えることができる絶好の史料です。ノートのなかにこだまする女性たちの声に耳を澄ませ、子育てという視角から現在とはどういう時代なのかをゼミ生とともに考えることをいまから楽しみにしています。

和田 悠（ジェンダーフォーラム所長、文学部教育学科准教授）